みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.77

ひと言

人々の命・誇りを大事にする社会に

佐藤　春治（センター運営委員）

11月の沖縄県知事選挙で、オスプレイの配備撤回及び米軍普天間基地の閉鎖・撤去、県内移設に反対を訴えた翁長前那覇市長が当選しました。翁長さんは、辺野古新基地建設を認めれば次代を担う子や孫に禍根を残すことになるなどとして、沖縄県内41全市町村の首長及び議長などが賛同し、安倍首相に提出した建白書の実現を求める姿勢を貫き、多くの県民の支持を得ました。

沖縄の子どもたちにとっては、米軍基地、米兵そして軍用機の激しい騒音などは生まれたときから存在し、目や耳にするのはごく当たり前のことなのかもしれません。しかし、昔を知る大人は子どもたちに、それが当たり前ではなく、命やくらしを脅かす射撃音や爆音などの響かない生活環境で過ごしてほしいと願っています。今回の沖縄県民の選択は、その実現に向けた一歩となります。沖縄県民の地道な取り組みで、米軍基地への経済依存度が大きく低下しました。それも今回の結果に反映したと考えられますが、それにも増して、「命（ぬち）どう宝」という沖縄の心とオール沖縄で歩み出した道をもう引き返さないという決意と誇りが、県民の間で広く深く結びついたからだと思います。この「命どう宝」に込めた思いは、被災地の思いでもあり、政治や教育などの根底にもしっかり据える必要があるのではないでしょうか。

目次

ひと言　佐藤　春治　1

日本臨床教育学会第４回研究大会・報告
「患者を丸ごとみる地域医療」の取り組みから、
教師・援助職のあり方を考える　2
多彩な参加者で、楽しいひとときき　寺沢　幹緒　9
導きをもらった学会参加　北村　裕子　10
「思い、繋がり」の大切さを再認識　手島せい子　11
大きな可能性を感じた臨床教育　高橋　翔平　11
多くの宿題を得た臨床教育学会　山岸　利次　12
臨床教育学会に参加して　山田　紗花　13
臨床教育学会に参加して　佐竹　優希　13

報告　高校生公開授業
ジャーナリスト金平茂紀さんによる「17才」
「一七歳」の現実あれこれ　豊永　敏久　14
はじめの一歩、それとも　宮原　淳子　15

被災地の今　これから
３年半、やっと新校舎に　鈴木　康史　18

教室の報告
聞こえる言葉に思うこと　土屋　聡　20

教育時評（番外）
研究センター設立時の初心を今、改めて心に刻み直す
中森　孜郎　22

わたしの出会った先生８
自治意識を育ててくれた教師たち　大木　一彦　23

本の紹介　24
センターの動き　24

題字：江島　隆二　表紙写真：千葉　建夫

日本臨床教育学会第４回研究大会・報告

「患者を丸ごとみる地域医療」の取り組みから、教師・援助職のあり方を考える

学会からお声がけいただき、研究センターは協賛という形で参加協力した日本臨床教育学会第４回研究大会が、９月27、28日の２日間にわたって行われました。大会は、３００数十名の参加者を迎え盛況のうちに終えることができました。１日目（27日）に行われた表題のシンポジウムの一部を報告します。

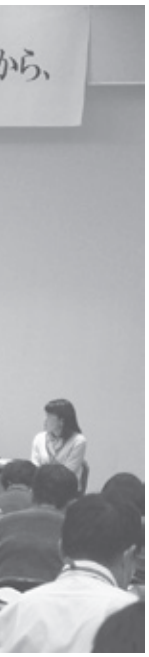
（司会）石木先生の地域を丸ごと見る地域医療の取り組みというお話に続きまして、どのようにその実践を捉えたかということで３名の方にパネリストとして登壇いただいて、後半の議論をしていきたいと思います。

手前から石木先生の娘さんの石木愛子先生です。二人目は、東松島市立鳴瀬未来中学校の制野俊弘先生です。三人目は、北海道の高校で養護教諭をされています本間康子先生です。さっそくですが、それぞれの分野で患者とか当事者、子どもを丸ごとつかむという視点をどのように育んでおられるかというお話をしていただきたいと思います。

（石木）石木愛子と申します。岩手県立高田病院の医師とご紹介いただいていますが、去年から東北大学の加齢学研究所の老年科というところで大学院生として仙台に住んで居ります。今でも週に１回、陸前高田の方に行って診療は続けておりますが、ちょっと被災地とは少し離れてしまっている状況です。若手医師の目線から訪問診療、それから患者を丸ごとみる、地域を丸ごとみる医療というのはどんなものと感じたか、お話させていただきたいと思います。

最初に、なぜ被災地で仕事をしたかを含めて自己紹介をさせて下さい。私は、医師６年目ですが、最初の２年間は、岩手の盛岡市で初期研修ということで働いておりました。その２年間が終わるあたりで震災が起きまして、父が陸前高田にいるということで、そこから被災地に行って２年間働きました。

さっそくその現地での医療についてですが、私が被災地に入ったのは震災から３日目になります。３日目の夕方に初めて父と感動の再会になったわけですが、次の日の朝一番には、父から「お前は被災地の避難所まわりをしろ」と仕事を命じられまして、感動を分かち合っている暇もないという感じでした。それで白衣も着てませんでしたが身一つで、地元のドライバーさん、それから看護士と一緒に被災しなかったところの公民館や小さな集会所、そういうところをまわって患者がいるかどうか、医療が必要な人はどこにいるのだろうかということを見てまわりました。そこで一番感じたのは、いかに医



者が無力なのかということでした。目の前に患者さんがいて、お薬がほしいとか具合が悪いとか言われても、まったく検査もできないですし、処方できるお薬もない。できることは話を聞く。励ますことも正直できないんです。そこですごく救われたのは、看護士の存在でした。地方の病院の看護士には、結構地元出身者が多いんですね。一緒にまわった方も地元生まれ、地元育ちの元気な看護士さんでした。その方が集会所にドーンと入りこんで行かれるんですね。「お元気ですか」と、私もちょっとわからない方言を使いながらにこにこしてお話をして行かれる。その笑顔があるだけで患者さんや避難されている方々が、高田病院は無事なんだねって安心をされている。医療というのは薬・検査だけではなくて、こういう地元に寄りそったコミュニケーション、温かさが基本ベースにあるのではないかと第一に感じました。

これは患者の有無をピックアップする作業だったわけですが、その後は映像にあったような訪問診療をやらせていただいてます。やはり診察室では見えないものが見えてくる。これが、とてもおもしろい経験でした。盛岡で研修医として働いていた時には、病院の中でしか患者は診ない。診察室に座っていると患者が入ってきて、白衣目線での診療を行うというものです。訪問診療でこちらから伺うと、主役は当然患者さん、患者の家族ということですね。例えば、糖尿病をお持ちの患者さんが病院にいらっしゃると、最初に採血検査をして、検査データが出て、それを見て今日は悪かったのか良かったのかというようなことで3分から5分ぐらいで終わるんです。そういう患者さんがお家にいる姿を見ると、いろいろわかることがあります。おこたの上にみかんやお菓子が山積みになっている、なんで糖尿病なのにあるのかな？　というと、実はお孫さんも一緒に住んでいるんですね。お孫さんがいるから、どうしてもお菓子が外せない。そうすると、ついついおばあちゃんも手を出して食べてしまう。そこまでは、ちょっと診察室では踏み込めない。そういうことが、いろいろ見えてくる。とてもおもしろい経験だなと思いました。すごくコミュニケーションが取りやすい、対等な目線、あるいは患者さんの方が上のような感じでコミュニケーションができて、いろんなことを教えていただけるというような体験、診療というのはとてもおもしろいものだなと感じています。そういうことで2年間働いてきたんですが、私も医師としてその時点で4年目、本来であれば私も医療の細分化というなかで消化器内科、胃腸の内視鏡とかをやろうと思っていたんですが、2年間陸前高田で働いて、それこそ臓器だけを診ていたのでは患者そのものを診られない、患者さんそのものの笑顔も引き出すことができないと感じました。ただ、どこでそういう勉強をしたらいいのかというのが日本の医療教育でも、まだまだ未確定なところがあるんですね。ただ自分で、自己流でそれを学んでいくのかと言われると、自己流にはしるのは少し怖いという気持ちがありました。また将来は東北地方で働きたいなという思いがありまして、いろいろ調べた結果、東北大学に高齢者医療の部門があるということがわかりましたので、去年からこちらの方に移っております。

そうやって地域から都会に来たわけですが、都会に来てまた気づいたことというのもあります。今大学病院で働いているんですけれども、やはり仙台の大学病院というところにいますと、職員の方もいろんなところから集まって来ているんですね。県内のいろんな地域はもとより、県外からの方も多いです。また大学という専門医療を学ぶ場ということで若手が多く、地元のことを知らない人が多いというもどかしさを私は今抱えて働いています。私は今、高齢者医療ということで結構認知症を診察しているんです。認知症というのは、本当にその方を丸ごと診なくてはならない疾患の一つです。糖尿病、高血圧あるいは脳卒中、それからおなかの胃がんの手術の後、さまざまな病気を持っている方が長く生きて、今現在認知症になった。認知症になったということになると、細分化された専門家の先生たちって一気に引きにかかるんですね。「あの人認知症だから、もう私たちやれることないよ」と手を引く先生が、残念ながら今も結構多い。そうなった時に私たち認知症を診る医者は、認知症だけじゃなくて、その他の病気もすべて診なくてはならないということです。その他の病気もすべて診るためには、やはり家族、患者さんのバックグラウンドを把握しなくてはならないんですけれども、残念ながら都会にいるとなかなかそれが見えないです。私自身がまだこちらに来て1年半で十分に地域に出て行けてないという現実もあるんですけれども、なかなか周りの医療スタッフからもそういう力を十分に引き出せていないというのが都会のデメリットなのかなと思います。そういうもどかしさを抱えているんですけれども、いろんな初めて会うような人たちが集まる都会で自分は何ができるのだろうかと実践していることを考えてみると、本当に小さなことですが、患者さんの話をとにかく聴くということ。すごく根本的なことなんですが、その方がどこで生まれて、どこで育って、どういう食べ物が好きで、どういう人と結婚したり、どういう人と一緒に過ごしてきたりという、そういうお話を普段の診療で、できれば30分から1時間ぐらいは絶対かけて一度にするようにしています。ただの診療で、具合はどうですか、どこが痛いですか、今日はどうですかというようなことだと全然見えてこないんです。こういうことを物語を聴くというふうに最近の言葉では言うのかなと思いますけれども、その物語を聴いていく中で、例えば、私は岩手出身ですが、あなたも岩手出身なんですかと、そこから話の糸口が広がってきて、患者さんが今まで教えてくれなかったことをたくさん教えてくれる。そういうことを大事にしています。

先ほど映像で、すごく素敵なおばあちゃん、おじいちゃんの笑顔がありましたけれども、やはり陸前高田で診ていた患者さんたちは、とても高齢な方が多いので、出演された方の中にはもう亡くなられている方も何名かいらっしゃいます。自分の仕事の中で満足できるものがあるというのは、すばらしいことですが、あのように映像で映った、今は亡くなられた方が向こうでどのように感じているのかな。私たちの自己満足ではなくて、やはりセンターにあるのは患者だということで、患者さんがどう感じていたのかなというのが、いつも自問自答しながら診療を続けております。

（制野） 東松島市の鳴瀬未来中学校から来ました制野と申します。よろしくお願いいたします。石木さん親子の話を聴いて非常に感激をしてます。先ほど患者丸ごと診る医療から地域丸ごと診

る医療へ。「患者」という言葉を「生徒」と置き換えて、「医療」というのを「教育」と置き換えて、丸々そのまま当てはまるんですね。生徒を丸ごとみる教育から地域を丸ごとみる教育へ、こういうつながりがあるんだなと思いました。それから今のお話で、どういう生活をして、どういう生い立ちをこの人は負っているのか。それから、例えばどういう結婚生活をしてきたのか、どういう子育てをしてきたのか、そういうことを物語という言葉でおっしゃってましたが、まさしく私たちが教育をする時に、この子どもは一体どういう生活背景をもってこの学校に来ているのか、どういう生い立ちをもってここに居るのかということを考えるということと重なっていく。医療・教育・福祉はすべて同じ土台の上に成り立っているんだなとすごく感じました。医療の世界でも福祉の世界でも同じ課題があるのかなと思いますが、我々は生徒に対しては生きていて当たり前という感覚をどうしても持ってしまいますが、実はそうではない。いろんな偶然とかきっかけがあって、ここに命があって巡り会っているんだということをもう一回確認した方がいいだろうということです。

体育教師なので、生きている証を見つける授業とか、あるいは鬼ごっこ、フットボール、御神楽の実践とかをやってきたわけですが、肝心の学校教育を作り上げていく時に、どうしても地域の問題というのは欠かせない。我々が地域すべてを背負うわけにはいきませんが、かといって子どもの命の土台となっている地域を考えずに教育できるのかということを少しお話したいと思います。

1年目にやった運動会ですが、目的をこういうふうにしたんです。運動会を人間・学校・地域の復興の場と位置づけ、そのための企画を立案する。普通であれば楽しい運動会だとか、生徒の笑顔が溢れる運動会という形になるんですが、もっと踏み込んで、学校というのは人間とか学校とか地域の復興の場ではないかと。それから生徒の自治と共同の力を最大限発揮し地域再生力の根を耕す。これから地域を育て耕していく子どもたちを育てるということですね。さらに離れ離れになっている地域の方々の再開の場とする。たくさんの方が集まりますので、そこで「ああ、よく生きてたね」と、「じゃあ、これから地域どうしようか」、そういう話がいろんなところで出るような場にしたい、ということでスタートをしております。開会式では、生徒が馬に乗って入場しました。もともと鳴瀬は馬の産地で、特に野蒜の沿岸部の生徒たちが馬に乗って入場したいと言ったので、いろいろ駆けずり回って仙台から馬を手配しました。この馬は震災で流された馬で、瓦礫の中から見つかった馬なんです。足とか胴体が傷だらけだったんですが、傷は治ったということでボランティアに連れてきていただきました。馬に乗っているのは生徒会長で、お父さんを津波で亡くしています。津波に巻き込まれた馬に乗っている生徒ということで象徴的な場面かなと思います。それから聖火リレーをやろうということになって、マッチやライターは一切使わないで、自分たちで火を起こしました。その火を校長さんが持って、泣きながらリレーをしました。

2年目の実践は、やっぱり子どもたちの負っている傷に対して我々は何ができるのかということです。いくら楽しい行事とか、みんなのアイディアを持ち寄ったと言いつつも、心の中に抱えているものは相当重いものがあります。お父さん亡くした子ども、お母さん亡くした子ども、それから天涯孤独になってしまった子ども、こういう子どもがたくさんおります。そうい

う中で単に楽しいとか、単におもしろいで終わるというのではなくて、学校で祭りをつくろうと。祭りをつくれば、その中からいろんな知恵が出てくるんじゃないかということです。2年目の運動会でも火起こしをして、来年からの統合が決まっていましたので、1回生からお願いをして聖火リレーをしました。もう70歳近いおじいさんたちも参加して、最後に生徒が火を付けるということですね。それから3本の綱を1本に編み上げるという作業をプログラムの中に入れました。地域の人とそれからお父さんお母さん方、生徒、教師一体となって1本の綱からもう1本の太い綱をつくることをしました。午後のプログラムに津波で流された御神輿をみんなで担ぐ企画をしたのですが、どうしても全員が御輿を担ぐことはできない。そこで綱を編んで、この綱を2箇所につないでみんなで引くという、引き綱のためにつくったんです。それで、地域の人たちは天狗の格好をしてきてくれて、塩で清めながらみんなで入場するわけです。後は、地域の人たちと一緒に楽しい行事を一日繰り広げるということです。2年目の最後は、みんなで風船を飛ばしました。地域の人たちにも風船を持っていただいて、非常にきれいに飛んでいきました。鳴瀬川の上流に向かって風船が飛んでいきました。

この時のことを、ある子が作文にこう書いてきたんです。「私が想っていたことは、自分が持っている風船を飛ばしたくないということです。この風船を飛ばしたら終わってしまう気がしました。ですので、みんなが飛ばした後に遅れて風船を飛ばしました。」と。この子は、なぜ風船を離せなかったんだろうと2ヶ月ぐらい悩んで、やっぱりこれは本人に聞いてみた方がいいだろうということで、本人にもう一回作文を書いてくれるかとお願いをしました。すると、こういう作文を書いてくるんですね。「あの震災から1年以上が過ぎました。今思えば震災について本気で考えたことがありません。いつもどこかに綺麗事をまじえて考えていたような気がします。私たち3年生にとっても中学校としても最後の運動会の日、最後の企画で風船を大空に飛ばしたとき、涙が溢れてきました。風船には未来の願い、辛さや悔しさ、様々な思いを込めました。」この子は、お母さんを亡くしているんです。それまでママ、ママと言っていたんですが、震災後お母さんと呼ぶようになったんです。いつまでも甘えてられないということで呼び方を変えたんです。その子が風船を飛ばせなかった理由を、こう書いています。「私は大好きな母を忘れそうになっています。忘れたくない、そう思っているのに少しずつ消えてしまいます。震災が起きる朝に交わした言葉も、声も顔も動作も。思い出せないことが多くなっています。それがとても怖いです。母が私の中から消えそうで怖いです。そして忘れていってしまう自分が嫌でしょうがありません。風船をなかなか飛ばせなかったのも『忘れてしまう』と思ったからだと思います。大好きな人が死んでしまう――私にとってそれは非現実なものです。正直、母は死んでいないと思っています。いつかひょっこり現れて、何事もなかったかのようにいつも通りの生活に戻る。私の名前を呼んで、他愛もない会話をしたり、私の成長を見て笑ったり泣いたりしてくれる。こんなこと考えてもどうしようもないと思いますが、私はそういった普通の幸せに夢を見て、いつか叶うと信じているのです。そう思わなければ、いつか自分が不安や悲しみで押し潰されそうになる気がします。この間、3年生にとって大切な進路説明会がありました。私は進路説明会があるというお知らせを父や祖母に渡せませんでした。父は仕事だと知っていましたし、祖母は学校に来るの

が大変でしょう。一番後ろの席に座り、私だけでも大丈夫と思っていました。けれど、みんな親がきて隣に座る。それを見た瞬間、少しだけ泣いてしまいました。それだけで泣いてしまう自分が情けなくて、母がいないことを改めて実感させられたような気がしてとても悲しかったです。母に会いたい気持ちが溢れてきます。自分の嫌なところやダメなところがどんどん見えてきます。人に頼りたいけど、そうすると相手が困ってしまうから相談できない。」と続きます。ここで初めて私自身が、この子の持っている生活の背景にあるもの、この子の生い立ち、あるいはこの子が今考えていることが丸ごと入ってくる。これがすべてと言うわけではないんですが、これで初めて子どもと対面ができる。こういう行事などをつくりながら、子どもと一緒に生活をしております。

先ほどの映像を見ながら、いいなあと思ったのは、患者さんがベットの上で足上げてごらんと言ったら、ここまで上がるよ、どこまでも上がるよって、やってますよね。あれ、まさしく生きてるっていうことの実感というか、自分はまだ生きてるよ、まだこれからも生き続けるよというメッセージをくれてるなと思いました。子どもたちも同じで、こういうことできたとか、こういうことわかったよとか、先生これが自分にとってすごくおもしろいことだよと教えてくれる。ああ、この子生きているんだな、いいなあって、すごく思います。震災前はなかなか感じることができなかったんですけど、今はそういうことを素直に感じられる。私自身も成長できたなと思っています。

（本間） こんにちは、北海道で高校の養護教諭をしています本間と言います。私の勤務する高校は経済的にしんどかったり、学力的にしんどかったり、家庭的にしんどかったりする子がたくさんいる学校です。

そんな中で、私は養護教諭ですから保健室に具合が悪いといって来る生徒たちと出会っています。「夜寝ているの？」とか、「ごはん食べてるの？」とか聞くと、だいたい生活の状況がわかってきて、寝てないとか寝れないとか、食べてないとか食べられないとか、食べる物がないとか、そんなことが出てくる。どんどん話を聞いていくと、やっぱり高校生なんだから自分でつくって食べれるでしょとか、夜ゲームばっかりしてないでちゃんと寝なさいとか。でも、そういうことではどうにもならないんだなということも、いろいろと見えてきます。

それでいろんな子に出会うんですけど、りょう子ちゃん（仮名）という子です。お父さんとお母さんが血を見るほどの大喧嘩をするので夜寝られなくて、いつも具合が悪くて保健室に来ていた子なんです。そんなことは学校の中ではおくびにも出さない。成績も優秀だしお友達との関係も上手にできているし、教員も誰もその子の家がそんなこととは知らなかったです。ある日、警察から児童相談所に連絡が入って、児相から学校に連絡が来るという回り道をして、その子の家がそういう状況だということがわかりました。いろいろあって、どうしても家に居られないときは、私の家に泊まりに来るようになったりして、親も何かしんどいなと思って、お母さんに学校に来ていただいてお話をしました。お母さんは「私はＤＶだという認識はないです」とか、「喧嘩はしているんだけれども、そんなにそんなにひどいですかね」という感じで、結構気丈だったんです。私からは、りょう子ちゃんの学校や泊まりに来たときの様子を伝えて、「子どもは自分の成長のためにしなければならない我

慢もいっぱいあるけど、しなくていい我慢もあって、りょう子ちゃんはしなくていい我慢をしているんじゃないですかね」と話しました。そしたら、お母さんがばあーと泣き出して、あの子にそういう我慢をさせているのがつらいと、初めてお母さんが弱音を出したんですね。ちょうど同じ世代のお母さんだったので「子どもは家にしか居場所がないから子どもが家を出てくるのはおかしいと思うんだよね。家を出るのは父さんでしょ。」っていう話をしたら、お母さんが「そうだよね、先生。私も本当はそう思うんだ。」って言って泣く。そういう話をしたことをお母さんからも私からもりょう子ちゃんは聞き、お父さんとお母さんは当然その後お家で話し合ってくれました。家での状況はそんなに改善してないんですが、お母さんの彼女にかけるまなざしがちょっと変わったのかなと思います。少し表情が和らいで、学校に来るようになっています。

それから学校はもうとっくに辞めてしまったんですけど、ずっと支援しているというか、関わり続けざるを得ないさやかちゃん（仮名）という子がいます。明日の分科会でもちょっと報告させてもらうんですが、お母さんが幼いころに亡くなって父子家庭で育っていて、お父さんはなかなか子育てと仕事の両立が難しくて、家を転々として夜逃げとかして公園で寝泊まりもしていたという経験を持っている子です。小学校からまともに学校に行っていなかったので学力が全然なくて、高校に入ってきたけど授業中も座っていられないので、すぐに退学しちゃいました。退学前は児童養護施設で、お父さんから離れて保護されて暮らしてたんですが、高校を退学しちゃうと児童養護施設も出なくてはならないので、お父さんのところに帰って行きました。それで風俗の世界に身を置くようになって、にっちもさっちもいかなくなって電話がきて、「じゃあ、帰っておいでよ」と言ってしまったら本当に帰ってきちゃって、一ヶ月ちょいくらい一緒に暮らしながら、生活保護の申請とかいろんな手続きを一緒にして、今でも関係が続いています。紆余曲折あり、私が望んだり願ったりするような方向ではまったく動いてくれず、少しでも安定した生活をと願っていろいろやってみても、私が差し出すサービスには何一つ乗らず、自分で勝手にすすきのの町に行き、勝手にホストと同棲するようになり、そして妊娠をし、今母になりました。

その彼女が妊娠中から母になって今子育てをする中で、劇的に変わっていく姿をまざまざと見ています。もともと命に対して敏感な感性の子だったのかなと思うんですけど、お母さんを早くに亡くしているので、新しく自分の身体から産まれ出た命というものに彼女なりに学びやら発見やら、愛しさやらいろんなものが今湧いてきている。でも母と早くに別れた自分は、この子とも何歳まで一緒にいられるんだろうみたいな恐怖にも取り憑かれたりして、明日も一緒にいられますようにと言って、毎晩祈りながら眠るんだなんて言いながら一生懸命子育てしています。

私が関わっている子たちは、18歳とか19歳でばんばん子どもを産んでいます。ばんばん子ども産んで、ばんばん離婚して、ばんばん生活困難になって、そしてきっと虐待もするかもしれないなという不安を抱えざるを得ない。だから、親だけが子育てをしないように支えて行く環境は地域でやらなくてはならないとすごく思うわけです。それで、そういう若者たちが集うシェア・ハウスをつくりたいと思っているんです。うちの子たち

就職もないんです。卒業してもなかなか町の中に働く場所がないので大変な生活になっていくんです。そういう人たちが集まって暮らせば、ちょっと経済的にも楽になったり、子連れで帰ってきたらみんなで子ども育てたりできるかなと、今ちょっと地域でそんなことができないかなという模索もしています。

（司会）ありがとうございました。お二人の取り組みについてご感想を含めてお聞きしたいと思います。

（石木） 今回のこのシンポジウムの打ち合わせを、先ほど中森先生とさせていただいていたんですけれど、その時から医療と教育は、すごく共通点が多いんじゃないかというふうに気づいてきて、今お二人の先生方のお話をうかがって、本当にその通りなんだなと感じました。共通点を見つけることが、すなわち良いことではないとは思うんですけれども、違いは私たちが診ているのは老いて死んでいく世代であって、先生方がみているのは産み出して育つ世代であるというふうに、それが大きな違いだなというふうに思いました。共通点としてかはわからないけど教育は学校でやるものだ、病気は病院で治してもらうものだという風潮ができているように思うんですけれども、やはりそうではなくて、教育も学校だけじゃなくて地域でやるべきものですし、病気だってやっぱり地域のことを考えながら医療していかないといけない。先ほどシェア・ハウスの話なんかもありましたけれども、産み出して育つ世代を、やっぱり高齢者は老いて、これを見守ってくれる世代ということで、一緒になって地域一帯になってつくっていこうという取り組みがすごく重要なんだなと、私たちの暮らしには大切なんだなというふうに感じました。制野先生のお祭り、地域の方がたくさん出てきて本当にすごい取り組みだなと感動しました。シェア・ハウス、ぜひ実現できたらと思います。

研究大会に参加して

多彩な参加者で、楽しいひととき

寺沢　幹緒

相談センターで毎日、子どもたちや親の苦しい胸の内と向き合ってお話を聞いていると、今の日本の教育の現状に大きな危機感を抱かざるを得ません。相談センターに相談を寄せる方々は、自分ひとりでは抱えきれない大きな悩みを持っている方が大半ですので、とりわけそうした感じを強く抱くようになったのかもしれませんが、現役の教員たちの話などを聞いても、教育現場の変質が、私の退職後4年間でより一層深刻さを増しているのではないかと感じています。

そうしたことを考えているときに、理論と実践の両面から教育の問題に切り込み、子どもたちの教育に関わる人たちを「発達援助職」と位置付けて、相互の連携を図り、その専門性を高めようとする臨床教育学会の存在を知り、一度は参加してみたいものだと思っていました。

シンポジウムⅠでは、石木幹人さん（岩手県立高田病院医師）が講師、パネリストが医師、教諭、養護教諭という構成でした。パネリストの人選も臨床教育学会ならではのものと感じたし、医師と教師の共通性も認識することができたと思います。シンポジウムⅡでは北海道檜山上ノ国町の教育委員で校長経験者でもある笹原克哉さんのお話が印象に残りました。資料として配布さ

れた笹原氏の「校長室だより」や「学校だより」の内容の深さ、豊富さに驚くとともに、こうした校長のもとで仕事ができる幸せ（と、ちょっぴりの「しんどさ」）を思わずにはいられませんでした。

「教育史・教育思想と臨床教育学」分科会での「生活綴方教育」の掘り起しをテーマとした発表は示唆に富むものでしたし、「東日本大震災と臨床教育学」分科会での制野俊弘さん（鳴瀬未来中学校教諭）による「命とは何か」を問う授業実践の報告には共感を覚えました。

また、2日目の「こども理解の視点と方途」分科会で発表した本間康子さん（北海道立高校養護教諭）の一人の高校生との4年にわたる関わりを丁寧に追いかけたレポートは、本間さんとの交流の中で、一人の人間として確実に成長していく姿がリアルに描かれ、私たちが取り組んでいる教育相談にも大いに参考になる内容でした。この分科会の2つめの発表は「援助対象と信頼関係を形成するコミュニケーションの視点と方法」（清泉女学院短期大学　塚原成幸）でした。私の現在の問題意識とも一致するし、理論的な話も聞けるのかと思って参加しましたが、何と中味は「ワークショップ」でした。塚原氏は元道化師、今は「臨床道化師」を名乗っていて、「入院している子どもの療養環境を豊かにするために活動している」のだそうです。あっという間に参加者の心をつかみ、一緒になってゲームを楽しませる塚原氏の力量には感心させられました。ワークショップの内容は、私が現役時代に顧問をしていた演劇部の稽古を思い起こさせるものがあって、楽しいひと時を過ごすことができました。

いろいろな分野の多彩な方たちが参加して、教育の問題を大きくとらえていこうとする臨床教育学会はまだ始まって間もない学会ですが、今後の発展を予想させる内容だったと思います。8月に行われた「教育のつどい」の不登校分科会の共同研究者と懇親会で親しくお話しできたのも収穫でした。

（みやぎ教育相談センター）

導きをもらった学会参加

北村裕子

日本臨床教育学会の案内をもらった時、臨床教育、まさに現場の教育、病院の現場も臨床、相通じるものがあると思った。さらに、研究大会のお誘いを読み進めていくうちに、臨床と臨床教育学という言葉の意味においては、私が今なお問い続けながら仕事をしていることであった。この学会は私に必ず何かを授けてくれることに確信を持ち、参加費も特別料金、早速申し込みをした。

特に関心を引き寄せられたのはシンポジウムⅠ「患者を丸ごとみる地域医療」の取り組みから、教師、援助職のありかたを考えるであった。

陸前高田病院の石木医師は病院が被災し病院での診療ができなくなり、患者の家のベッドが病院のベッドと考え往診診療を始めた。患者をまるごと見る医療から地域をまるごと見る医療へ、地元に寄り添ったコミュニケーションの訪問診療、往診は病院の診察では見えないものが見えてくる。患者のバックグラウンドを把握しないといけない。患者の話を聞く。生まれや育ち、どんな食べ物が好きか。生命の土台となっている地域。医療、教育、福祉いっしょに育ちあう。子ども、大人、老人が助け合える共同の場所にしていく。住民と対話し地域の強みを見極めながら進めてゆく。私が感じ、思い描いていたことと同じことを考えている人がいた。うれしくなった。

会場で買い求めた『子どもの「いのち」を守りぬくために、第3集』は宮教組がとりくんだ大震災の検証と分析をまとめたものだ。ここまでまとめあげたことに感服した。文章からは迫真にせまるものが伝わってくる。

学会前日、津波被害にあった旧・山元町立中浜小学校を見学した。海からわずか150メートルの位置に建っている。当日のまま残されており、案内してくださった岩崎先生のお話は感度の高い判断であり行動であったと思う。

私は今、農家のお手伝いをしている。自

然に生かされていることを再認識するとともに感謝せずにはいられない。第3集にある「人がどんなに自然に支えられているのかを教えられて、みんなでどう生きるかを考えながらいきていく」同感である。日本の国に欠けているのはここではなかろうか。

人は皆〝いのちを守り育む〟ためにつながりあって仕事をしている。人権を守るのは主権者である私たち。これからも自分の立つ位置を見失わないように暮らしていきたい。

（看護士）

「思い、繋がり」の大切さを再認識

手島　せい子

2年前退職、今年からスクールカウンセラーとして、子ども達からエネルギーを貰いながら楽しく勤務中です。私の対応は果して良いのだろうかと、自問自答の日々です。そんな折センターからお誘い、内容も豊富で各安価格ラッキー！　わくわくしながら参加しました。

一番興味関心があったのは、双子の重症心身障害児を育ててきた母親を、子どもと共に生きる『主体』と捉え、母親の語りに着目した根本レポートです。私流の解釈ですが、自分史を語り聴いて貰えたことで、Ⅰ母親Aさんは、①自分への問い直し、②内面の変化に気づく（整理する）、③主体性を持ち自己決定の方向が見えてくる。Ⅱ専門職としての支援のあり方は、自主性自立性を妨げない等の見極め、考慮する（ア立ち位置、イ適度な距離間、ウ時期、エ内容等）Ⅲ医療福祉行政制度等も含め様々な課題も浮き彫りとなる。ラポート作りが基本ですが「語り」と遂語記録の大切さを再認識しました。

高校養護教諭の本間康子氏の実践は、生徒を丸ごと受け止め、見限らない姿勢（卒業後も）、その思いと行動力に脱帽です。塚原成幸氏の「ユーモア・コミュニケーション体験」は学会の硬いイメージを打破し、緊張感を解き、楽しくすぐ使える実践的な学びでした。

その他印象に残った言葉―メモから―

○人との出会いが（関係性が）人を変える。

○人間は何歳になっても学べる

（笹原克哉氏）

○子ども達を見る視点として、①よく眠れているか　②群れて遊べているか、体を動かしているか　③良く（どのように）育てられているか　④安心できる頼れる大人がいるか　⑤食べられているか

（浦本真信氏）

私は思いや人の繋がりを大切にし、自分でできることをしていくことをモットーにしています。2年前仲間と共に「学校に誰でもふら～っと気軽に立ち寄れる保健室があるように、身近なところに保健室があるといいね。」の思いから仲間7人（元・現役養護教諭・元教員・主婦）で日曜日開設、涌谷町に立ち上げました。２００円でティータイムしながら、おしゃべりや話を聴いてもらいたい人は話をする、物づくり、安心できる空間を、ともに作っていくなど模索中です。学会の今回の研修でも「思い、繋がり」の大切なことを自分なりに再確認でき、「学ぶことは次へ進む第一歩」機会を与えくれた皆様に感謝致します。

（元養護教諭）

大きな可能性を感じた臨床教育

高橋　翔平

今回、この学会に参加しようと思った理由は大きく二つある。一つはこれまで学会という場に参加したことがなく、学生のうちに一度は参加してみたいと考えていたから。もう一つの理由は、「臨床教育学」という言葉に純粋に興味を惹かれたからである。教育心理学、教育社会学、教育行政学などの耳慣れたものではない、この臨床教育学とはどのような研究を行っていくのかを知ることは、今後の自分自身の教育に対する考えをさらに広げてくれると思った。

私は一日目のみの参加であったのだが、午前と午後の二つの研究発表を通して臨床教育学は何が対象でどのような研究内容であるかということが概観できたように思う。午前の部では主に子どもを対象とした発表であり、実際の現場での経験を軸とした内容であったため、より身近なものとして聞くことができた。特に、関西学院大学の小谷先生らの研究発表には非常に興味を惹かれた。小谷先生もまた元は教員ということで現場での経験が研究の基盤になっているのだと感じられた。テーマは「睡眠」、誰もが経験している所を取り上げ、そこからさまざまな要因との関連を明らかにしていこうとする研究は、即実践にも繋がることが考えられる。ここが、「臨床教育学」の「臨床」という言葉の持つ意味であり、理論（研究）が実践（教育現場）へと結びついていくのだろう。教育の主役である子どもを中心に据えた、より現実の教育に即した研究発表がここでは行われていた。

午後の部では、教師を対象とした「ナラティブ」をキーワードに据えた発表であった。ここで、臨床教育学の対象となるのは子どもだけではなく現場で働いている教師も含まれるということを知った。教師のナラティブを聴くことの意義を研究している、オウル大学のエルッキさんの発表と、リワークオフィスに勤務し教師の職場復帰を支援している廣瀬さんの発表はどちらも自分にとって新鮮な内容であった。と同時に、将来教師を目指している自分にとっては関係のあるものだと思いながら聞いていた。特に、廣瀬さんの発表から、若い教師だけではなく、ベテランと言われる教師も職場復帰を目指さねばならぬ状況に陥ることもあるのだと知り、それを支援する立場というものは非常に重要な役割を果たしているのだと感じた。

自分なりに見えてきたことをまとめると、教育は現場での実践があってこそ成り立つものであるから、そこを基盤にして研究をすすめてゆくことが必要であり、それがすぐに子どもや教師といった教育の中心となる所へ還元されていかなければならないということである。常に教育実践と結びついている臨床教育学という学問は、これからの教育に対する大きな可能性を秘めていると感じた。

（東北大学 学生）

多くの宿題を得た臨床教育学会

山岸 利次

9月27、28日に開催された日本臨床教育学会第4回大会に参加させていただきました。研究者として、また、養護教諭の養成に携わる者として多くのことを学ばせていただき、また、多くの宿題をいただきました。

学会大会に参加した2日間、私が一貫して考えたのは「子どもの〈現実〉に教師はいかに関わるのかということでした。「生活綴方」についての研究発表や、課題研究における被災や貧困という過酷な現実に置かれた子ども達を支援する方たちのお話、臨床における研究者の立ち位置に関するラディカルな研究、さらには臨床教育学会がこれまで大事にしてきた「語り（ナラティブ）」についての思考。こうしたことがいろいろと頭を巡っていたからなのですが、特に私の頭と心を揺さぶったのは、北海道で高校の養護教諭をなさっている本間康子先生の報告にあった「世界との出会い方を変える（ことを手伝う）」という言葉でした。「現実（リアリティ）」というと、一般的には、今年話題になったあの映画の有名な一節「ありのままに」ということを連想してしまいます。しかし、「現実」というのは決してそんなものではありません。ここで私たちは「事実」と訳される英語「fact」がラテン語「factum」に由来すること、そして、「factum」はもともと「つくられたもの」という意味であったことを思い出していいのかもしれません。「事実」そして「現実」というもの「つくられたもの」であり、また、それは同時に私たち自身が（他者と共同で）「つくりだすもの」でもあるのです。

綴方実践における子どもたちの作文。物語療法における「語り直し」。これらが示唆するのは、言葉による「語り直し」が「現実」を再構成し、そのことが―本間先生の

言葉を借りれば―「世界との出会い方を変える」ということにつながるということです。そして、こうした「語り直し」すなわち「現実のつくりなおし」において、子ども達の「語り」を引き出し、一緒に「語り合う」という決定的な役割を果たす可能性を教師は持っています。多くの子ども達が生きづらさに直面しているなかで、教育の果たすべき役割としてこうしたことがあるのではないか。こんなことを考えました。

（宮城大学）

臨床教育学会に参加して

山田 紗花

私は今回、初めて学会に参加させていただき、教育の現場で日々活躍されているさまざまな職種の方々のお話を聴いて、たくさんの刺激を受けました。現在私は看護職の勉強をしながら教職に関する勉強もしています。そのため、シンポジウムⅠのテーマには特に興味がありました。高齢化が進む今、病院ではなく、自宅や介護施設などの在宅で人生の最後を迎える人が多くなってきています。そこで需要が高まってきているのは、地域で活躍する看護職です。ある一定の地域における集団を対象に、様々な健康に関する問題を見つけ、対象に合った解決策を考案し、実施、評価、修正するということは、幅の広い視野や豊かな感受性、創造力などが必要だと思います。今回の学会で、子どもと密に接して働いていらっしゃる先生方が日々感じ、考えている生の声を聴き、地域で生活する子どもたちを守り、成長を助け、教育の機会を保障することは、看護の在り方と似ているように感じました。子ども一人一人の〝個〟を大切にしながら、集団全体としての問題にアプローチしていくことは難しいことだと思います。そのような中でも、教育の在り方、学校の在り方を懸命に模索している方々の姿を見て、自分も将来はそのような教育者になりたいと思いました。教育に対する興味が一層大きくなる機会となり、お話を聴かせていただいた皆さんにはとても感謝しています。

（宮城大学 学生）

臨床教育学会に参加して

佐竹 優希

今回初めて学会に参加した。私が今回この学会に参加したいと思ったのは、大学の講義で扱った課題図書の著者である青砥先生の話を聞きたかったためと、臨床教育におけるさまざまな研究についての話を聞いてみたいと思ったためである。学会と聞くと敷居が高いイメージを持っていたが、参加してみて考えさせられることが多くとても勉強になった。もちろん知識として足りないことは多く、もっと知識があれば別の考え方が持てたり、理解が深まったりするのではないかと思う点も多々あったが、そんな中でも日本臨床教育学会に参加した後では参加する前よりも自分の教育に対する考え方や視野が広がったように感じる。それに、大学の講義とは違ってさまざまな視点から話を聞くことができてとても面白かった。

学会がどういうものかということ自体よくわからない状態で今回この日本臨床教育学会に参加したが、参加してみて本当に良かった。学ぶことがとても多く、また狭いながらに自分の教育に対する視野を広げることができた。今後もしこのような機会があれば積極的に参加して自分の見解を広げていきたいと思った。

（宮城大学 学生）

報告　高校生公開授業

ジャーナリスト金平茂紀さんによる「17才」

今年の高校生公開授業は、毎週土曜放送TBS「報道特集」のメインキャスター金平茂紀さんを授業者としてお願いし、10月12日（日）、31名の高校生の参加でもちました。金平さんは、ノーベル平和賞に、高校生と同年代のマララ・ユスフザイさんが決まったことから、急遽タイトルを「17歳」と変更し、さまざまな世界に生きる17歳を取り上げての授業となりました。

この日の報告として、授業を参観されていた2人の先生からお寄せいただいた感想と、当日の高校生の感想を紹介します。

「一七歳」の現実あれこれ

豊永敏久

TBSの「報道特集」といえば、定評のある報道番組です。授業のネタになる情報源としても役立つので、私は予約録画で毎週ビデオをとり保存しています。そのメインキャスターの金平さんが仙台に来て下さるなんて貴重な機会です。チラシにあった講演題は「世界の取材現場から見た日本～私たちはどう生きるか～」。私は、番組の中で、たびたび紛争地などに出かけて行って現地から生々しい情報を報告してくださる金平さんが、番組では伝えきれないことを披露して、そこから浮かび上がってくる日本という国のあり方を、生徒たちにグイグイ考えさせるような授業をするのだろうなあ、これは聞き逃すわけにはいかないぞ、と思いました。そこで授業をしているすべてのクラスで「絶対に勉強になると思うから行ってみない？」と呼びかけました。その結果、大学の推薦入試に向けて私が小論文の指導をしていた三年生の女子生徒が二名参加することになりました。

公開授業が始まって最初に金平さんが示した視点は「一七歳」。同世代の生き方を通して世界と日本を考えさせるという趣旨のようです。最初の「一七歳」は、この授業のわずか二日前にノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんでした。金平さんは、彼女がイスラム過激派に狙撃された直後の誕生日（二〇一三年七月）に国連で行った演説のビデオを冒頭部分を除いてほぼ全部上映しました。この演説は「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、一本のペンでも世界を変えられる」という言葉で有名になった演説です。私自身、彼女の国連演説の全部を把握していたわけではありませんでしたので、感銘を受けました。

私自身が印象に残ったのは、彼女がイスラム過激派について語った箇所でした。いわく「ジャーナリストが私の学校の男の子に『タリバンはなぜ教育に反対しているのか』と尋ねたことがありました。男の子の答えは単刀直入でした。本（筆者注：イスラムの聖典『クルアーン（コーラン）』のこと）を指さして『タ

リバン兵はこの本に何が書いてあるか知らないからだ』と言ったのです。彼らは神のことを、学校に通っているからという理由だけで少女たちを地獄に落とすような、狭小な保守主義者だと信じています。テロリストたちはイスラムとパシュトゥンの名をかたり、自分たちの個人的な利益を求めているだけなのです。パキスタンは平和を愛する民主主義国家です。パシュトゥン人は娘や息子たちの教育を望んでいます。

そしてイスラムは、平和、人道、同胞愛を説く宗教です。イスラムの教えによれば、教育を受けるのは子どもの権利であるだけでなく、その義務と責任でもあるのです」（訳文は二〇一四年一〇月一一日付東京新聞記事による）。

ここでマララさんは、本来のイスラム精神と、イスラムを名乗りながら実は利己的に行動しているだけの人々（過激派）とをきちんと区別すべきことの重要性について語っています。これは非常に大切なことだと私は思います。私たちの宗教に対する誤解と偏見も、本物と偽物の混同の上に成り立っている場合が多いからです。実際、昨今「イスラム国」を名乗る過激派集団がイラクとシリアで活動を活発化し、欧米人ジャーナリストを惨殺しているとのニュースが続いていて、日本でもイスラムに対する偏見の広がる可能性が高まっています。

ところが生徒たちの反応はいまひとつでした。金平さんは、ビデオを見せる前に「この演説を聴きながらどんなことを感じたか、例えば彼女がなぜスカーフをしているのかとか、何でもいいから終わったあとで話してください」と予告していました。金平さんは、マララさんが、例えば女子教育の普及率などの点でも日本とは大きく違う環境の中で、人権と平和を実現するために懸命に生きている事実から、自分たち日本人に何が求められているかを考えさせたかったに相違ありません。しかしほとんどの生徒たちの感想は「一七歳とは思えない」とか「すごい演説だった」など、自分自身と比較してあまりにも違いすぎるマララさんへの感嘆にとどまっていました。私が引率した二人の生徒も後日「お互いの生き方を十分に深め、結びつけるまでには至らなかった」と述べています。このこと自体が、日本の平均的な一七歳（高校生）の国際性の乏しさを示しているのかも知れません。改めて教育と報道の役割の重さを感じざるを得ませんでした。

期待した反応がなかったためでしょうか、金平さんは後半はいささか疲れた様子で、約三〇年前の日本の高校生（写真家・橋口譲二さんが『一七歳の地図』を撮影した、全盲の女子高校生と沖縄の男子高校生）を二人紹介したあと、生徒たち全員に東日本大震災の体験を話させて終わりました。生徒たちにとっては後半のほうが身近で刺激的だったようですが、私自身は、マララさんの素晴らしい演説が宙に浮いてしまったようで、いささか残念に思いました。

（白石高等学校）

初めの一歩、それとも

宮原淳子

「もう少し他の高校生とみんなで話がしたかったな。」私の知っている高校生に「今日はどうだった」と聞いた時の答えである。彼は生徒会長で生徒会長選挙の時も生徒総会や、いろいろな行事のときも、割に積極的に自らの考えや意見を述べるタイプの生徒だ。私も、彼はもっとあれこれ発言をするのではと思っていたので、「今日はおとなしかったね、」というと「いや～、やっぱり自分が突破口になるのは難しいわ、本当はもっともっと他の人の意見も聞きたかったし、話がしたかったんだ。」「そう

そう」ともう一人うちの学校から参加していた生徒も相槌を打つ。彼らは示し合わせたわけではなく各々の興味と関心からそれぞれ申し込んだという。この場にきて、お互いにびっくりしたそうだ。そんな彼らだから、きっかけさえあれば本当に話ははずんだのではないか、と思うと少し残念である。でもそのきっかけ、突破口になる力が彼ら自身にとっても一番必要なのかもしれない。

授業の場で生徒のいろいろな発言を引き出すのは難しい。ましてや、何人かの知り合いはいるものの、初めて会う人たちばかりの集団である。もちろん、時には自分を全く知らない人たち相手のほうが発言をしやすい時もあるだろうが、やはり皆が口を開くきっかけをつかめないでいた。それが前半の印象である。金平氏の挑発もなかなかだったのだが、そこに乗るには彼らは現代っ子すぎたのだろう。多少は「そんなことない」と思った生徒もいたのだろうがそれをストレートに、口に出す生徒はいなかった。日本の高校生の大多数は自分の意見を述べることにそれほど慣れてはいない（もちろんわれわれ大人も似たり寄ったりで高校生に限ったことではないが）。

最初の自己紹介から我々大人にとってはなじみ深い人たちの写真を並べ、自分がどんな人間であるかを、普通とは少し違った形で差し出した金平氏。本当はその辺りから、話がほぐれるはずだったのであろう、と思うが、（実際に私はその写真に写った何人かについてどのような繋がりがあるのか興味をひかれた、なぜ、どのような関わりが？　友人なのか、それとも？　と質問したくてうずうずした）高校生にとってはその人選は少し大人すぎたのだろう。当たり前といえば、当たり前である。

次に彼らと同じ年代の高校生が喋る映像。でもこれも彼らにとっては少しかけ離れたことと映ったようだ。本当はそのギャップに彼らと自分たちの何が違うのだろう、とか、少し前までこんな番組が作られていたのに今はなぜ全く違うのだろう、とか話のきっかけになりうるものだったのだが、金平氏も言ったようにお行儀がよすぎる彼らにはまだハードルが高い。時のマララさんのスピーチ、少しだけ話が広がるか、に見えたがまだほぐれない。

後半「きみらにしか語れないことを語ってほしい」との要請に一人一人が「あの時、自分はどこで何をしていたのか、何を見たのか、何を感じたのか」それぞれの震災経験を語り始めた。その内容は個性的で、話をした、ということだけでなく、人の話を聞けたということが、よい体験になったのではないかと思う。特別に、そこにあれこれと意見を加えたわけではないその話一つ一つが、実は聞いている人にいろいろな考えを巡らせるきっかけになっていた、と思う。その中の何人かが、とても印象に残る発言をした。もしかしたらそれに何かを言いたいと思った生徒もいたのではないかと思うが、残念ながらそこで時間切れとなった。限られた時間で、誰もが自分の意見を述べたり、他人と意見を闘わせたり、深く考えたりすることはなかなかに難しいことだ。特に前にも述べたように日本人はそのような場に慣れていない。

決して、考えていないわけではなく、自分の意見を他人に話したくないわけでもなく、ずっとそのような機会が少ないままに高校生となっているのではないか、と思う。けれども、何かを求めて、そしてきっかけがあれば、そうしたいと思っているからこそあの場へ足を運んだのだ。何か物足りなさを感じ、どうにかしたい、とうずうずし

ている、そんな高校生たちが外へ、ではなく本当は学校でこそ、そのような場がいくつもできる、あるいは作ろう、と思えるそんな学校であるためには（同じ年代の集団が同じ場で毎日顔を合わせて何かを学んでいる場なのだから）と考えさせられる、私にとってはそんな一日だった。

（仙台商業高等学校）

高校生の感想から

★　金平さんは、我々を「当事者」と言いましたが、その中には「半当事者」もいるように思います。例えば親や兄弟等の身内が亡くなったり、家が流されたりした人は「当事者」ですが、そうでない人も被災地に住んでいます。被災地に住んでいるだけで、大した被害もないのに、「復興しろ」や「支援しろ」という人もいます。そういう人達は「半当事者」だと思います。だから、被災地に住んでいる人全員の言葉が重いわけではないので、誰が本当の「当事者」なのかを見極めて話を訊くべきだと思いました。

★　自分と近い歳の人たちが何を考え、どういう体験をしたのかを知ることができたので、自分の今までの行動と照らし合わせてみたときに、自分は震災のときの体験を忘れていたんだなと改めて感じることができたのでとても良い刺激になりました。

金平さんがどういった経緯で今の職業に就いているのか、自分たちと同じ歳のときにどんなことを考えて生活していたのか、何がきっかけで今の自分があるのかなどをもっと詳しく知りたかったです。

★　一番最初に見た盲学校に通っていた17歳の女の子の話と最後に参加者から聞いた震災の話がものすごく心に残りました。盲学校に通っていた女の子のお話は、私自身考えさせられることがたくさんありました。例えば、女の子が牛を触っているシーンを見て、「怖くないのかな?」とか「なんでそんなに笑顔でいることができるのかな?」とか思いました。目が見えないということはこれから自分の身に何が起こるかが分かりません。だから怖れずに牛を触る女の子を見て、力強さを感じました。また、目が見えないということは、女の子は指をさして、「あれがさ〜」とか「これがね〜」というふうな会話ができません。だからきっとその女の子は多くの言葉を知っていて、多彩な表現力を持っているんだなあと思いました。

震災の話では、やっぱりその話を聞くと心が痛むし、千葉にいた頃の自分の馬鹿さというか、やるせない気持ちになりました。また、私が千葉にいた頃に思っていた話を素直に話したけれど、これを話すことは本当に正解なのかと思ったし、不謹慎かなとかいろいろ思ったりしました。結果、話して良かったのか分からないけど、周りの人が正直にそのときの気持ちを話しているのを見ると、話して良かったと信じます。今日はこのような機会があったので、たくさん考えさせられることもあり、良い経験となりました。また参加したいと思いました。

★　今日の授業で「17歳について」授業をしていただき、同じ歳でも考えていること、今まで経験したことの違いを改めて考えるきっかけとなりました。自分が今いる日常がはたして日常であり普通のことなのか?　我々が今いることが非日常なことではないのかと思いました。最後に同じ高校生が3／11について言っていたことの中で「毎日を後悔せずに生きたい」と言っていたことを自分の中でも意識するようにしたいです。

★　17歳シリーズの盲学校の女の子の話が印象的でした。私自身も弱視で、小学校のころは特別学級に所属していました。しかし、女の子がビデオの中で話していたように、私も周りの人と他の環境におかれるのが嫌で学校生活のほとんどを協力学級の方で過ごしていました。私は結局その後は中学校は特別学級に入らず、高校も普通高校に通っています。とにかく周りの人と一緒でいたいという気持ちが強く、年に何回か行われる盲学校でのイベントごとにもいやいや親につれていかれるという感じでした。しかし今日のビデオを見て、盲学校に通っている女の子だって私と変わらない普通の高校生をしているんだなと率直に感じました。今日の会で、少しだけ私の中での障がい者の人々に対する壁のようなものが薄くなった気がします。あのビデオを見れてよかったです。

★　将来報道関係の仕事に就きたいと思っているので今回参加させていただきました。昔と今の報道番組のスタイルの変化や人ごとのように語るメディアなどの様々なお話を聞くことができました。今放送部に所属していて少しメディアのことに詳しくなったかも、という錯覚を起こしていたことに気づかされ、すごく恥ずかしかったです。もし、将来報道関係の仕事に就くことができたら、視聴者と一緒に作品を作り上げられるようになりたいと思いました。そして、人ごとだと思われないような言葉のチョイスができるように、日常に転がっている言葉を見つめ直していきたいです。

被災地の今 これから

3年半、やっと新校舎に

鈴木康史

〈久しぶり、朝に校庭で遊ぶ児童の姿を見た〉

ようやく、毎朝、校庭で元気に遊ぶ児童の姿が見られるようになりました。ブランコに乗っている児童、鉄棒にぶら下がっている児童、ジャングルジムや滑り台、ターザンロープで遊んでいる児童、鬼ごっこをしている児童もいます。

「これが、当たり前の小学校の姿だよね。」

朝に、校庭を見ながらそんな声が聞かれたことがあります。

今まで間借りをしていた吉田中学校は、中学校なので遊具がありません。朝は、中学校なので部活の朝練があり、小学生は登校後教室で過ごすしかありませんでした。それで、朝に校庭で遊ぶ小学生の姿を見るのは、震災後約三年六ヶ月ぶりなのです。

〈被災・間借り〉

三月十一日、長瀞小学校は二メートルほどの津波に襲われました。幸い、亡くなった児童はいませんでしたが、家族を亡くした児童は数名いました。長瀞小学校は、使えなくなり、四月からは近くの吉田中学校に間借りすることになりました。吉田中学校は、長瀞小学校の卒業生だけが行く中学校です。みんな長瀞小学校の卒業生であり、長くいた先生方は、みんな知っている生徒です。私も震災時六年担任だったので、卒業させた生徒がいました。卒業させた児童と、毎日会うという何とも不思議な経験でしたが、三年半もいると当たり前になりました。部活を頑張っている姿を見るのもいいものです。小中一貫校になると、こうなるのかな？

〈震災後の転出・転入〉

震災前、二百五十名ほどいた児童は、学校が再開してみれば二百名を切りました。転出児童がたくさんいたのです。仲の良かった友達が転校した児童もたくさんいました。その後、何人かは数か月後、また一年後に戻ってきたこともありました。福島原発から遠くはないという理由で、転出した児童も数名いました。転出転入がたくさんありました。震災前は、ほとんど一学年に二クラスだったのに、単学級の学校になってしまいました。中学校の教室数の関係上、四十数名で二クラスであっても、教室には学年ごとに入り、最初の年は二クラスが一つの教室に入りました。でも、担任は二名です。一年後に、プレハブ校舎ができて、ようやく一つの教室に、四十名以上が入ることはなくなりました。

〈間借り生活ゆえの調整〉

中学校と小学校の同居は、お互いが合わせることが多く大変です。前述したように、部活動の朝練があるので、朝は校庭で遊べません。休み時間は、中学生が半分、小学生が半分を使用します。中学生は、小学生に気を使ってかあまり校庭で遊びませんが……。遊具は、中学校なのでありません。鉄棒だけはあります。中学生用なので高いのですが、小学生には人気がありました。放課後は、部活があるので、当然校庭では遊べません。幸い、体育の時間はしっかりとれました。

中学校も、小学校も、単学級と言ってよい規模なので、一時間目から体育は入りましたが、校庭でも体育館でも、しっかり体育はできました。ただし、中学校は短縮授業になることが多いので、時間がぶつかるこ

とがよくありました。そうした場合は、中学校の方で空いている校庭か体育館に急遽変更してもらったり、待っていてもらったりしました。小学校、中学校とも、授業時間が常に一定、時間割が常に一定というわけにはいかないので、連絡調整がうまくいっていないと、そういうことがよくありました。

チャイムは、授業時間が中学校五十分、小学校四十五分、そして休み時間は中学校五分、小学校十分なので、最初の年は始まりの時間だけ鳴らしていました。三年後には、ほとんど鳴らさなくなりました。小学校、中学校とも、時計を見て動くのが当たり前、ということになったように記憶しています。

間借り生活での大変さは、もっとありますが、このぐらいにしておきたいと思います。当然良さもあったわけで、卒業生が部活を頑張っている姿が見られました。文化祭も見ました。合唱コンクールに向けて練習する姿も見ました。頑張っている中学生の姿は、小学生にも良い影響を与えたのでないかと思います。現在担任する六年生が、中学校から新校舎に移る時、「部活を見られなくなるのは残念だけど……。」と、話していました。

中学校から、新校舎に移る上での児童たちの楽しみは遊具でした。新校舎よりも、遊具でした。特に、ターザンロープ。前述したように中学校には遊具がありませんが、今度はあるのです。二学期、初日は新聞やテレビの取材で六年生しか使用できませんでした。小雨でも、遊びたいという六年生の声が多く、迷いましたが予定していた通り、十分ほどでしょうか、遊具で遊びました。楽しそうに遊ぶ姿は、河北新報にも掲載されました。翌日からは、他の学年も自由に休み時間に遊具で遊びました。

〈行事の連続〉

新校舎に移った後は、分かっていたことですが、行事の連続でした。運動会をあえて九月にもってきました。中学校に間借り中は行事の前だけ体育の時間を増やすということができないので、練習がしにくい。新校舎を見にたくさんの地域の方にも来てほしいという理由で、全職員が理解の上で、九月二十日にもってきたのです。十月十一日には学習発表会があり、運動会の練習をしながら、同時進行で学習発表会の練習もしました。忙しいとは思いつつ、職員には不満はなかったと思います。自由に練習ができるからです。練習場所は、間借りしていたころと違いたくさんありました。多目的ホールや音楽室、少人数教室や生活科ルーム、練習する場所はたくさんありました。調整さえすれば、いつでも練習ができました。そして、運動会も学習発表会も、保護者から好評でした。

新校舎ゆえに、行事は続きました。学習発表会後は、安倍総理大臣の訪問がありました。航空写真撮影がありました。支援で和楽器奏者の演奏会や記念植樹がありました。新校舎ゆえの行事ではありませんが、十月には持久走大会があり、十一月にはこどもまつりがありました。そして、ようやく二学期の行事が終わった感じがします。

〈新校舎に移ってよかった〉

全職員が、そしてすべての児童が、（新校舎に移ってよかった。）と感じているでしょう。新しい校舎に、新しい遊具、新しい図書室、自由に使える教室がたくさんある。忙しいけど、心にゆとりがある気がします。

〈現地再建ゆえに〉

現地再建したということは、東日本大震災級の地震が起きれば、また二メートルほどの津波が来る可能性があるということになります。ゆえに、教育委員会が二年前かな？　行った学校再建に関する保護者アンケートでは、確か約半数が現地再建を希望していませんでした。

津波が来ることを想定した避難訓練も二回行いました。屋上に避難する訓練、津波による被害の少なかった間借りしていた吉田中学校まで歩いて避難する訓練も行いました。津波が来る恐れがあることは、常に意識していなければならないのです。

（亘理・長瀞小）

教室の報告

聞こえる言葉に思うこと

土屋　聡

一　言葉が救ってくれた

あなたは、教室でどんな言葉を使っていますか。子どもたちに呼びかけるときは「あなたたち」でしょうか。それとも「おまえら」でしょうか。自分を指すとき「先生は」でしょうか。私は、自分のことを「私」と言います。「君たち」と呼びかけます。加美町の小学校で一年担任になったとき、Rちゃんのお母さんに「君たちって言うのを聞いて驚いたよ。いきなり一人前なんだもん」と言われました。なるほど一人前！　悪くないなと思いました。

私はどなたに対しても「本人が呼ばれたい名前」で呼ぶよう心がけています。敬称がつくものもニックネームもいろいろ。白石の小学校で「あっちゃん」希望者が二人いて困ったことがありました。Sくんが「じゃあ、ぼく、あっちゃんマンにするよ」と言って解決。あっちゃんとあっちゃんマン。教室が笑い声とふわっとした幸せに包まれたこと忘れません。呼ばれ方を大切にしたいと思うのは、私自身の小学生時代が忘れられないからです。

甘ったれで勉強もスポーツもできず無口でうだつの上がらない小学生でした。小学一・二年は優しいお母さん先生に「さとしちゃん」と呼ばれました。三・四年担任は教室でタバコをふかしチョークを投げつける男性でした。「土屋！」と呼び捨て。萎縮しました。友だちができてもすぐに転校していき（炭鉱町夕張。閉山続きで落ち着きませんでした）いつもぐずぐずしていました。いじめられました。五年になって担任が変わりました。ある授業中にY先生は私を「どやちゃん」と呼びました。教室がどっと沸きました。（先生がどやちゃんって言った！）という驚き。存在を認められた喜び。Y先生、ありがとうございます。

私は、一人ひとりの違いを認めあえる世の中になることを希望しています。ジェンダーフリーという考え方に賛成します。みんな男らしさとか女らしさとかから解放されるべきです。「ジェンダーフリーだから呼び名の敬称は『さん』で統一」ということがあります。卒業式で名前を呼ぶときに「さん」を付けることはよいですが、日常も全部「さん」はいずいです。言葉が使い分けられ、心も使い分けられそうです。私は「君」「ちゃん」「さん」いろいろ使っています。

呼び方とは、存在の認め方。子どもとどのような関係を結びあうのか、その入口。呼び捨てとはまさに呼んで捨てているように感じます。また画一的な所作は人と人との関わりをいずくしているかもしれません。

二　言葉は交わすもの

これはヘイトスピーチだ、と感じることがあります。ヘイトスピーチとは、特定の人種や民族への憎しみをあおるような差別的表現のこと。差別と侮蔑を込めた投げつけるような言葉のことです。私がそう感じるのは、学校の中でのこと。人種や民族に限ったことではありません。

叱り方とはなかなか難しいもの。感情的になってしまうことがありました。白石の小学校にいた二十代、反抗的なTちゃんを吹っ飛ばしたことがありました。Oくんが授業中に作った紙飛行機を、みんなの前で破ったことがありました。あのとき教室のみんなが「あー」とため息のようにもらした声、忘れません。TちゃんOくん、ごめんなさい。

岩出山の小学校で担任したM（当時六年生）が私に向かって言いました。

「あんたには、がっかりしたよ！」。普段使わぬ「あんた」は率直な表現でした。「がっかりした」には期待していたのに・信用していたのにという、関係性を伝えるぬくもりがありました。私はMに学び、子どもたちを叱るときに「がっかり」という言葉をよく使います。（娘さんのお父さんになっている）M、ありがとう。私は精進重ねていますよ。

教員は叱ったことが伝わったかどうかに自信がもてないから「分かったか」と訊ねてしまいます。子どもが黙っていると落ち着けません。善悪の判断を身につけさせることよりも、叱っている自分を無視していないことを確かめたいのです。必要のない大きな声を上げたり、机を手のひらでバン！ と叩いて脅かしたり。あれらがなくてもきっと伝えることができただろうに。ごめんなさい

叱ると怒るとは違います。叱ることは教育的行為。怒ることは感情の状態。叱る行為はその後への期待が込められています。けれども、期待が込められない言葉をときどき耳にします。相手を見下す・あげつらう・決めつける・おとしめる言葉。まさにヘイトスピーチです。またはパワハラです。見下され、あげつらわれ、決めつけられ、おとしめられる環境で、子どもたちは何を学ぶのでしょうか。子どもたちは、見下され、あげつらわれ、決めつけられ、おとしめられることを怖れるでしょう。同時に子どもたちはそのような言葉を身につけるでしょう。何とかしなくてはいけません。言葉は投げつけるものではなく、交わすものですから。

三　「言語環境の充実」とは

あなたは、おしゃべりしていますか。子どもたちと（互いに）心開いて会話していますか。あなたが子どもたちに話す言葉は、全て指導・指示ではありませんか。

「言語活動の充実を」とか「言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整えて」という話を授業研究の検討会や指導主事学校訪問の講評などで耳にします。その施策として、話し方マニュアルを教室に掲示していたり、辞書を引くことを促したりされています。悪くないでしょう。でもきっと大切なのは、日常会話なんだと思います。

何をおいても「学力向上」第一。家庭学習習慣化のために休み時間も給食時間もずっとノートに向き合ってペンを走らせなくてはならない教員。疲れます。イライラします。子どもたちの様子に目を配るとか相談に乗るとかは困難。いじめ対策とか不登校にならないようにとか、たくさんの要請があり過ぎて対応できません。対応できないことが不安を大きくします。疲れは取れません。時間がないから一人ひとりに応じた指導なんてできず一斉指導し、一斉指導で適応できない子どもたちは迷惑な存在になっていく。教員を志したときの思いを振り返り、こんなはずじゃなかったと感じることが多いのではないでしょうか。心がほぐされなきゃやっていけません。私は子どもたちとの会話で救われています。この仕事続けられているのは子どもたちのおかげです。そしてそれゆえ子どもたちのために仕事していこうと少しだけ背筋を伸ばすんです。

今日、携帯電話は、電話よりもSNSで文字の伝達し合うことに使われています。会話も文字でします。大人も子どももきっと同じ。限られた語彙の中でのやりとりになります。疎外感を生じさせることも多いでしょう。たぶんそれらは「会話」ではないのだと思います。会話とはまさに「会って」「話しあう」こと。おしゃべりをすること。ほっとすること。言葉は温度（ぬくもり）をもつものです。全ての子どもたち（いずれ大人たち）に「あなたの話を最後まで聴く人がいるんだよ」ということ伝えたいです。伝えていきましょう。

四　最後に

先日学級文庫の灰谷健次郎さんを読み返しました。久しぶりです。ほっとしました。「きみはダックス先生がきらいか」。この本を読んでから子どもたちに敬語で話すことを心がけるようになったんだと思い出しました。山中恒さんの本も読み返そうと思っています。あなたも児童文学、いかがですか。

（遠田・月将館小）

●教育時評（番外）

研究センター設立時の初心を今、改めて心に刻み直す

中森　孜郎

今年は、研究センターを設立して20年目にあたるとともに、子どもの権利条約を批准して20年目でもある。この間に、第1次安倍政権によって教育基本法が改悪されてしまったが、その時大江健三郎さんがすぐさま、「朝日」紙上で、「ついに失われてしまった教育基本法の小冊子を作って、新しく教師になる人、若い母親、父親が、胸に入れておく、そのようにして、それを記憶し、それを頼りにすることを提案します。」と呼びかけた。それ以来、教育基本法の小冊子はずっと、私の上衣の内ポケットの中で生き続けている。

研究センター設立時の趣旨は、今読み返しても決して古くはなく、それどころか、第2次安倍政権が「教育再生」の名のもと、「教育改革」をゴリ推ししている今、初心に立ち返らせてくれるほど、新鮮に感じられる。

（センター代表運営委員）

みやぎ教育文化研究センター設立趣旨

子どもたちの健やかな成長と個性豊かな発達を願って

子どもたちは一人ひとり、かけがえのない生命と測り知れない可能性をもって、この世に生まれてきます。この子どもたちの健やかな成長とたしかな自立、個性ゆたかな発達をたすけるため、最善の環境とゆきとどいた保護・教育を保障することは、大人や社会の大きな責任です。

その責任を果たしていくには、子育て・教育の経験や実践の交流と吟味、そして研究が必要です。このセンターは、そのための協同の場です。

日本国憲法・教育基本法および子どもの権利条約の理念の実現のために

私たちが子育て・教育のいとなみをすすめていく上で、よりどころとなるのが、日本国憲法・教育基本法・子どもの権利条約に示される理念です。

憲法は国民主権・平和主義・基本的人権の理念を示し、教育基本法は「この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきもの」として、民主教育の理念を示しています。また国連が採択した子どもの権利条約は、「子どもの最善の利益が第一義的に考慮される」べきことや子どもを権利の主体としてとらえるという子ども観をうち出しています。

私たちは、子育て・教育のいとなみにおいて、これらの理念をよりどころとしながら、同時にその実現をめざして、誠実に努力していきます。

教育の再生をめざして

本来、学ぶことも、教えることも、育てることも、喜びに満ちたものであるはずです。ところが、わが国の子育て・教育をめぐる現状は、子どもにとっても、親にとっても、教育者にとっても、余りにも不安や苦悩に満ちたものとなっています。今日、子どもと教育をめぐる問題は多様で、しかも深刻です。

今、私たちが緊急にとりくむべき課題は、これらの諸問題の克服に立ち向かい、子育て・教育に「人間」をとりもどし、安らぎと喜びと希望をとりもどすことです。このセンターは、そのすじ道を明らかにします。

21世紀に生きる子どもたちのために

目の前の子どもたちは、まちがいなく「地球時代」とよばれる21世紀を生きていくわけです。

今、世界はかってない激動と混沌の時代を迎え、その中で、わが国の進路や果たすべき役割も問われています。今日、私たちは環境問題・南北問題・民族問題・エネルギー問題をはじめ、さまざまな問題に直面しています。このような時代を主権者として生きていく子どもたちに、どのような学力や能力やモラルを、いかにして育てていけばよいのでしょうか。このセンターでは、このような教育の課題に前向きに取り組んでいきます。

研究の自由と公開を原則として

このセンターにおける研究は、全く自由で何ものによっても規制されず、またお互いにさまざまな意見を尊重しあって進められます。また子育て・教育に関心をもつすべての人々に広く開かれています。

そして、研究の自由と公開の原則のもとで、お互いの信頼と連帯を強め、よりよき子育て・教育の創造をめざしていきます。

（1994年2月19日）

わたしの出会った先生 8

自治意識を育ててくれた教師たち

大木一彦

1956年、岩手県盛岡市に生まれた私は、高度成長期とともに成長をした。

3歳からバイオリンを習い、母親の聞いていた「基礎英語」「続基礎英語」をいっしょに聞いては先に覚えてしまうような子どもだった。中学・高校の数学教師の父の1万冊を越える蔵書に囲まれ、ツケで好きな本をいつでも買うことができる環境に恵まれていた。

私は、「恩師は誰か」と問われると、正直困ってしまう。個性豊かな多くの先生方に様々な形でお世話になってきたというのが実感だ。自分の結婚式にも誰かをお呼びして誰かをお呼びしないと失礼だと思い、結局誰もお呼びしなかったような失礼な人間なのだ。

今日はその中で、中学教師の私のルーツとなっている岩手大学附属中学校時代の恩師達のことについての思い出を語ってみたい。

……ピラ・ギムラ・悪造・ペキン・竹馬・渡満・もやし・ギャング・長介……先輩から引き継がれたニックネームのついた教師達に囲まれ、楽しい学校生活を満喫した。

私は私語が多く、「一年間、クラスに一番迷惑をかけたの誰だったと思ってるの」と尋ねられ「生徒では僕だけど、おとなも混ぜれば先生です」と言ってしまうような生意気な生徒だったので、さぞかし教師はやりにくかったことだと思う。

「よく考え誠をもって働く人間」の学校目標。管理班・保健班・レク班・勤労班・広報班と班単位で行われた係活動。何かあるとすぐ開かれた班会議・学級会議。

頭でっかちになることを諌められ、常に自分たちで考え行動することを教師達から求められたように思う（この時の経験を踏襲して、教師になった私も班ごとに係活動を受け持つやり方を一貫して取り入れた）。

ある班会議の思い出で、意見交換が白熱する中で、小柄な女子のオハシが大柄な男子に向かって「黙れ、ワンタン」と叫んだ一言に、みんなでびっくりしたあと明るく笑い合ったことを覚えている。何について議論していたかは忘れたが、いつも真剣に話し合っていた良き思い出なのである。オハシは盛岡のタウン誌の編集者、ワンタンは開業医として恩師達の主治医になった。

特に覚えているのは、修学旅行に関する二年の時のことである。当時、母校は北海道への修学旅行に代わり、岩手県内一周の学習旅行を実施していた。何となく北海道より県内はダサイと感じていた私たちに教師は「お前たちと話し合って決める」と言っていた。

ところがある日、職員室清掃の班の生徒達が、「大変だ、大木。こんなのが○○の机にあった」と県内学習旅行の行程表を見つけ僕らの下へ走ってきた。

「相談して決めるって言ってたのに」「あいつらきたねー」

まもなく開かれた学年集会で、私たちD組は教師への反発の一点のみで団結し「北海道への修学旅行」を要求した。A・B組から県内で様々な体験をする意義を訴える意見や私たちの教師批判に対し、先生が準備してくださるのは当然と教師擁護の発言が相次ぎ、多数決の結果私たちは敗北した。私たちは、「A・B組は先生の言うことを良く聞くお利口さんだから」などと愚痴った。

あの時は反発したが、きちんと学年集会で多数決を採るなど生徒の声を大切にしてくださるすごい教師集団だったんだなと思う。

その後私は実行副委員長になり、稲作農家・酪農開拓農家・漁家での聞き取りと体験学習を中心とした四泊五日の充実した旅行を過ごすことができた。

自分の言いたいことは言わないと気の済まない私の性向は、この先生達のおかげでつぶされず活かしていただいたのだと思う。

（仙台・上杉山中）

センターの動き

〈10月〉

3日　20周年の準備のための資料づくり。

8日　金平さんと電話が通じ、高校生公開授業についての最後の打ち合わせをする。著書販売の手配。

9日　高校生の公開授業の準備。受講高校生増える。

10日　事務局会議。学会研究大会についての総括。会の内容については「よかった」と。日本臨床教育学会にいいものを残してもらった。現場教師の参加がもう少しあればというのは心残りなこと。

12日　高校生の公開授業。金平さん、昨夜仙台入りしていたので早くに会場での準備をする。できるだけ生徒と距離を縮めて授業を進めたいとのことで机をはずす。授業テーマ名は「十七歳」。写真家・橋口譲二の写真集「17歳」をベースにして展開するプラン。ノーベル賞受賞者のマララさんが17歳、受講者の多くも17歳ということ。授業の最後は、高校生全員が自分の3・11をしゃべる。金平さん、「君たちもマララと同じようにすばらしい17歳ではないか」と言って締めくくる。

14日　大型だと騒がれていた台風が今朝仙台を通り抜ける。

15日　仙教組の二関さん、公開授業のビデオを編集して届けてくれる。

17日　76号の別冊、校了。

20日　S中学校の講師・Tさんの授業「平家物語」を観に行く。午後、哲学講座。アリストテレス。

21日　つうしん76号の送り状と執筆者への礼状書き。

23日　つうしん発送準備。やっと終わる。

24日　改訂ホームページ案の一部が示される。自由につかいこなすには時間がかかりそうだ。事務局会議の前に「つうしん76号」が届く。会議の前に発送作業。会議は「高校生の公開授業」の総括が主になる。

28日　被災地聴き取り報告書の校正。

29日　鳴瀬未来中・制野さんの授業を観にいく。1時間ぐらい検討会。6時半から、会館の「15年度以降の公益事業についての見直し」の会議。

〈11月〉

4日　会館から提示された来年度事業について相談センターと話し合う。

7日　被災地聴き取り記録整理を終え、印刷に送る。

8日・9日「教育のつどい」

11日　冬の学習会のセンターの「講座」（ではないが）、話題提供を千葉建夫さんのほかに小野寺由美子さんに頼む。事務局に連絡を入れる。

12日　15年度事業検討についての話し合い。3時から5時10分まで。

14日　事務局会議。つうしん76号についての感想では、特集「こどもの3・11」については好評。

16日　10時から「道徳と教育研究会」。太田直道さんが修身の歴史資料を報告。参加者11人。

17日　午前、千葉さんと3人で20周年記念誌についての話し合い。せっかくの記念誌ゆえ、3月つうしん発送時に「会員」に送ろうという話が出る。午後、哲学講座。アリストテレスについて。

18日　20周年記念のつどいの申し込み少ない。手分けして声掛けすることに。千葉さん、20年誌の通史の部分完成したものを届けてくれる。校正のため。

25日　20年誌の最後の確認。印刷に入る。

26日　参加者を募る電話かけ。高橋達郎さん来室。運営委員会の日程の打ち合わせをする。

27日　20年誌、50冊製本完了。若い教師の学びの会。千葉政典さんの「注文の多い料理店」の報告をもとに話し合い。

28日　事務局会議。議題は20周年記念についてだけ。報告確認で終わる。

30日　設立20周年記念のつどい。11時から14時半。参加者は36名。参加者一人ひとりのお話は今後のために大いにありがたかった。一区切りとしての行事が終えた。

〈12月〉

1日　会館に12月の予定表提出。震災聴き取り記録集（2）ができあがってくる。

2日　別冊原稿入れる。英語の佐々木忠夫さんのレポートなかなかよい。生徒の感想もよく読んでいて気持ちよい。

4日　教弘済に、たいへん遅れて13年度分の助成金報告書を発送する。つうしん本誌の打ち合わせ。

5日　聴き取り記録集のなかに話し手の名前の間違いを発見、あわててすべて訂正。しばらくぶりでつぶやき日記を書く。なかなか時間がとれず「日記」という名が泣いているように思う。

8日　聴き取り記録集（2）を、話し手12人に手紙を添えて発送。

（春日）

▼本の紹介▲

宮城県教職員組合編
『子どもの「いのち」を守りぬくために』
東日本大震災を心に刻む
～学校で何があったのか　語りたい、残したい、伝えたいこと～

宮城県教職員組合は『教職員がつづる東日本大震災』を第1集・第2集と刊行し、その後『東日本大震災教職員が語る子ども・いのち・未来』というタイトルで明石書店から出版されています。

今年の9月、第3集として『子どもの「いのち」を守りぬくために』が発行されました。

本書は、宮城県内で亡くなった361名の小中学生の被災状況とその教訓、そして被災校34校の詳細なデータ、県や市町村が明らかにしなかった子どもの犠牲の記録や学校の被災状況を初めて網羅的に明らかにした記録集になります。「3・11」からの教訓を語り伝えていくためにも多くの方に読んでほしい本です。

頒価　1000円

申込先と問合せ先　宮城県教職員組合（Tel　022-234-4161）

申込方法　（Fax　022-274-2130）で連絡ください。

発行：（一財）宮城県教育会館みやぎ教育文化研究センター 2014・12・25 発行責任者：春日辰夫
〒981-0933 仙台市青葉区柏木 1-2-45 フォレスト仙台 5F
http://www.mkbkc.com TEL022-301-2403FAX022-290-4026